

池坊の立花に使用した植物にみる風景表現の変遷

A study on the evolution of landscape expression based on analyzing the plants utilized in Ikenobo Rikka

陸 丹* 山本 清龍* 中村 和彦* 下村 彰男**

Dan LU Kiyotatsu YAMAMOTO Kazuhiko W.NAKAMURA Akio SHIMOMURA

Abstract: Ikenobo is considered the origin of Japanese Ikebana and the style of Japanese Ikebana with the longest history. Rikka is unique and one of the major flower arrangement styles of Ikenobo. It first appeared in the 16th century (late Muromachi period) and underwent major developments during the 17th century. Rikka is known for illustrating landscape views by arranging various plants together into one piece of work. Research is focused on studying classification, shape, and positioning of plants in Rikka works; as well as trying to find the connection between these arrangements and the landscape expression represented by these works. The research also focused on finding the connection between the variation in the positioning of the plants according to landscape visual distance and the changing of landscape expression from the Edo period to present. The study is based on the analysis of written descriptions in Kashos, Kadenshos, and the drawing records in Hanagatae of the historical arrangement of works. By studying both the written descriptions and visualized drawing records, the research analyzed the change in the symbolic meaning of landscape expression represented by various plants, the evolution of history for Yakeda and Ashirai of Rikka, and the characteristic of Rikka plants arrangements.

Keywords: Ikebana, Rikka, plant, landscape expression

キーワード：いけばな、立花、植物、風景表現

1. 研究背景と目的

池坊(いけのぼう)は日本における最も歴史の長いいけばなの流派であり、その歴史は飛鳥時代にまで遡ることができる¹⁾。その後、室町時代に「池坊」のいけばな流派が結成され、仏前供花から立て花(たてはな)を経て立花(りっか)という独自のいけばなの様式を成立させた。立花²⁾は多種多様な植物によって自然風景を表現するいけばな様式である。立花の制作と相伝のため、秘事奥義を記す書である花伝書³⁾が作られた。現存する最古の花伝書とされる『花王以来の花伝書』⁴⁾(以下『花王』と略す)には図絵によって当時のいけばな様式が記録され、『池坊専応口伝』⁵⁾(以下『専応口伝』と略す)は池坊の基本理念を表現、確立し、池坊を立花界の主流へと押し上げた。この『専応口伝』は1523年の相伝開始以来、いくつかの写本が残され、後の花伝書の範となった。

17世紀前半、立花の理論が確立されるとともに、花伝書とは相反する性格を持つ花書が刊行されるようになった。先にも触れたが、両者を比較すると、花伝書は特定の受伝者のみが眼にするもので秘匿性が高いのに対し、花書は立花の大衆化を図るために一般に公開されるものである。このように相反する性格を持つものの、花伝書と花書はどちらも自然風景を立花作品にいかにか表現するかが記載されている。また、江戸初期以降になると、立花が描かれた花形絵(はながたえ)が作成され伝承された。花伝書と花書は立花による風景表現の方法が文字として記述される一方で、花形絵は立花の実態が写されている。花形絵は江戸初期から現在まで、同じ流派(系統)によって継続的に作られて残され、系統的に風景表現の変遷を追うことができる価値のある資料である。

風景表現に関する研究は、これまで主に絵画と文学作品が対象とされてきた。たとえば、工藤ら⁶⁾は柿の表象表現にみる風景観の変遷の研究に絵画を用いた。また、谷ら⁷⁾は山水画における竹が含まれる空間の表現の特徴を明らかにした。さらに、小泉⁸⁾は絵画、文学、地理学の視点から通史的に日本人の風景観を論じた。総じて、風景表現の研究は多数存在するが、いけばなを対象としたも

のは数えられる程度である。たとえば、立花に関する研究としては、深田⁹⁾¹⁰⁾が花形絵の脇に書かれた作品の制作の時間、場所等をもとに、立花制作の建物を分析したが、描かれた作品そのものは分析対象とされていない。また、立花の風景表現に関する研究成果もみられ、村上¹¹⁾は立花が大自然を象徴的に表現することを論じたが、立花の役枝の名前と代表する風景的意味が混同されるなど、立花が表す風景への考察が不足している。さらに、陸ら¹²⁾は池坊の立花に表現される各視距離帯における風景認識の空間的広がりや注視状況、連続性の時代的変遷を考察したが、風景表現に用いられた素材に関する分析が十分ではない。以上を概括すると、歴史、文学、造園学等の領域において立花に関する研究がみられるものの、風景表現の方法、素材に関する知見の蓄積は少ない。

そこで本研究では、立花を構成する要素として植物に着目し、立花作品に使用された植物の種類、形態、配置と風景表現の内容の関係性を明らかにすること、立花における各視距離帯別の植物の配置から、江戸時代から現在に至るまでの風景表現の変遷を考察すること、の2点を目的とした。

次章以降で詳述するが、本研究の手順を概説すると、まず、花伝書、花書を解読した上で花形絵の分析を行った。花伝書と花書は花を生ける際の指南書であり、池坊における風景表現の方法を読み取ることができる。また、古くから残されている花形絵からは、写實的に記載される各時代の代表的な立花作品を把握でき、作品に使用された植物とその状態を確認できる。そこで、この両者を用いて各時代における植物の用いられ方の特質を明らかにし、風景表現の変遷を考察した。

2. 花伝書と花書の解読

(1) 研究対象

立花に使用された植物の意味を明らかにするため、本研究では、室町時代から現代までの池坊系の花伝書と花書を研究対象として取り上げた。

*東京大学大学院農学生命科学研究科

**國學院大學研究開発推進機構

まず、室町期の『花王』(1486)は現存する最古の花伝書であり、他の伝書とは異なり、主に図絵から構成されている。しかし、立花が形成されるまでの花の形式と表現内容を確認できるため分析対象として取り上げた。次に、『花王』以降では、『専応口伝』(1523)、『仙伝抄』(1536)¹³が相伝されている。『仙伝抄』の原本は現代には伝わっておらず、成立年代、編者ともに明らかではないが、その奥書によれば、天文5(1536)年に池坊専慈(専応)が相伝したと伝えられる書である。さらに、後の『専応口伝』(1542)¹⁴の内容には変化があるため研究対象に取り入れた。以上、4つの伝書によって立花成立当時の状況を把握した。

加えて、江戸時代の花伝書『臥雲華書』(1630)¹⁴、及び『古今立花大全』(1683)¹⁵、『立花時勢粧』(1688)¹⁷、『草木上下位』(1804)¹⁶、昭和期の『華道読本上下』(1942)¹⁸¹⁹、現代の『もっといけたい立花』(2010)²⁰の5冊の花書の内容を整理し、立花の発展について把握した。

(2) 研究方法

1) 『花王』について

『花王』の全47の作品図にはタイトルと解説文が付されている。そこで、タイトルと解説文の両者からは飾る場所、表現内容などの作品の制作目的を、解説文からは用いる植物と風景表現に関わる用語を抽出した。

2) その他の花伝書と花書について

その他の花伝書と花書から植物に関する記述を把握、整理した。具体的には、記載された植物が持つ意味と表現内容に着目し、記述内容を抽出した。また、植物の使用方法、配置状況を把握するために、立花の構成要素の役枝(道具)とあしらい(小道具)に関する記述を抽出した。

(3) 結果

1) 立花が確立される以前の花

『花王』の図絵に記載されるタイトルと解説文から作品の表現内容と用いられた植物の種類を判断した。たとえば、第1図のタイトルは「土用花」であり、描かれた作品の枝にそれぞれ「諸仏列席枝」「王君安人之枝」「地神出入花」などの解説文が書かれている。飾る場所と用いた植物の種類を判別ができないが土用の行事に飾る作品に対して仏教、神道の教えを取り入れたことが読み取れた。また、第2図のタイトルは「扇花」であり、解説文は「庭モトノ柳ノ梢コス風」を心の揺れ動きに喩え、恋心を表す時や酒の

席に飾る場合に相応しいと書かれている。このように、全47の作品図のうち、仏教、神道の式典と祝祭行事に飾る花が13作、感情表現の花が6作、住宅環境に飾る花が9作、生活活動に関わる花が5作と読み取り、制作目的が不明な図は14作だった。作品の解説文からは、15作に植物に関する記述が、5作に風景に関する記述を確認できた(表-1)。次に、用いられた植物をみると、種類を特定できたタケ、ヤナギ、ウメ/白ウメ、マツ/コマツ、ハス、クリ、エノキ、ツバキの9種であり、概念的に取り上げたものは「野の芝の葉」や「木の花」などだった。植物の扱われ方の特徴としては、①「竹林七賢」にちなんだ祝祭行事へのタケの使用、②同種のマツとコマツの樹齢の違いによる区別、③ウメと白ウメなど花の色による使い分け、④「枯の折枝」といった枯れた植物の使用、の4つが読み取れた。さらに、風景に関する記述では、庭などの人工的風景と自然風景の描写、山と水辺の表現が見られた(表-1)。

2) あしらいの分化と発展

立花は役枝(道具)とそれを補うあしらい(小道具)から構成され、本研究では結果の比較を容易に行えるよう、現代の役枝とあしらいの名称によって分析を行った(図-1、表-2)。なお、役枝の分化と発展についてはすでに整理¹²されており、ここではとくにあしらいに着目すると、室町時代には役枝のみを確認でき、江戸時代にあしらいが登場した。その最初のあしらいは「叩(ひかえ)」と統一的に呼ばれ、配置、使用方法には定めがなかった。『古

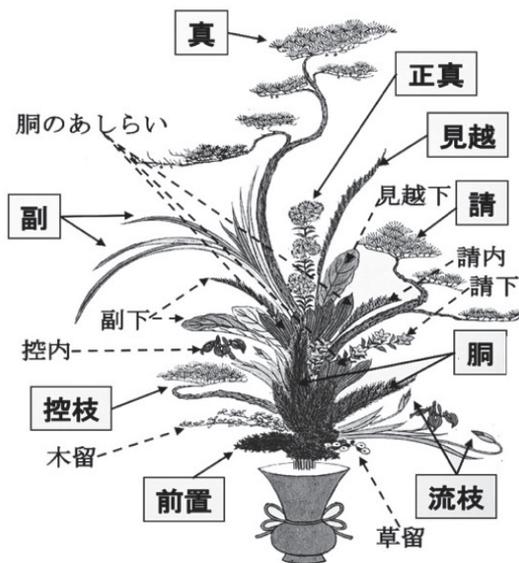
表-1 『花王以来の花伝書』の植物と風景に関する記述

番号	タイトル	制作目的	植物に関する用語	風景に関する用語
1	烏帽子取花	祝祭行事に飾る	タケ	-
2	七賢花	祝祭行事に飾る	タケ	-
3	扇花	感情表現	ヤナギ	庭、風、山
4	柱荘花	住宅環境に飾る	ウメ	-
5	床ノ柱花	住宅環境に飾る	野の芝の葉	-
6	座ノ上にツル花	住宅環境に飾る	橋の花	-
7	冬ノ花	-	マツ、ヤナギ、ハス、水辺の物	-
8	滝の花	-	クリ、エノキ、ツバキ、白ウメ不可	-
9	草ニ下木	-	クサ、コマツ	夏山、春見
10	春花	-	ツバキ、枯の折枝	-
11	夏ノ木ノ花	-	木の花	-
12	秋花	-	木、水辺の草	水辺
13	片クツシノ花	-	水付枝	-
14	立分花	-	水持ちの枝	-
15	連歌花	生活活動に使う	水持ちの枝	-
16	広縁ノ花	住宅環境に飾る	-	山口、庭の心得
17	岸クツシ花	-	-	岸崩れ

表-2 役枝とあしらいの意味

名称	読み方	意味
真	しん	一瓶の中心となる枝。真の動きで、ほかの役枝も変化化する。
正真	しょうしん	一瓶の中心線に位置する枝。
副	そえ	真の曲がりに添う形で、真を生かし、補う枝。
請	うけ	真と副の働きを受ける枝。
控枝	ひかえ	請と調和を取りながら、副の下の空間に働く枝。
流枝	ながし	請と控枝とのバランスを取る枝。
見越	みこし	正真の中ほどから後ろに働き、作品の奥行きを出し、遠景を表す枝。
胴	どう	作品の中央に位置し、役枝に動きを送り出す枝。
前置	まえおき	一瓶の下から作品を支えて安定させる枝。
-内	-うち	役枝より中心に近いあしらい(胴内、控枝内、請内、流枝内、内副)。
-下	-した	役枝より中心に離れるあしらい(副下、見越下、請下)。
-留	-とめ	前置の両側のあしらい(草留、木留)。
胴脇	どうわき	胴の左右に働くあしらい。
色切	いろぎり	胴と前置の区切りを表すあしらい。
大葉	おおは	ビワ、シャガなど面的な素材で、作品を引き締めるあしらい。
後圍	うしろかこい	一番奥に挿し、作品の奥行きを出すあしらい。
座	ざ	役枝の位置が変化した時、元の位置を示すあしらい。

注) 『もっといけたい立花』(2010)より作成 括弧内は現在使われているあしらい。



注) 胴のあしらいは胴内と胴脇を指す。

図-1 立花の役枝とあしらいの名称

(『新刻瓶花容導集』より作成)

表-3 花伝書に記述された植物とその使用方法・意味

番号	伝書の内容	出処
1	「破籠に古枝をすてゝ」	序文
2	「只小氷尺樹を以て江山敷程の勝概をあらわし」	序文
3	「凡初順の花藏といふより法花こいたるまで花を持て縁とせり」	序文
4	「冬は群卉凋落するも盛者必衰のことはりをしめず、其の中こしも色かへぬ松や檜原はをのづから真如不変をあらはせり」	序文
5	「靈雲は桃花を見、山谷は木犀をきき、みな一花の上にして開悟の益を得しぞかし。抑是をもてあそぶ人、草木を見て心をのべ、春秋のあはれをおもひ、本無一旦の興をもよすのみにあらず、飛花落葉の風の前にかゝるさどりの種をうる事もや待らん」	序文
6	「真には松或は当季の花、亦は常盤木可然して前右の脇を可心得也。」	本文-1
7	「凡春の千枝さし過て、藤つゝじなどの折ふしより牡丹、芍薬、杜若、紫苑、仙翁花など、いづれものびゝどと水ぎわもちと高く用べし。秋の千草、菊、竜胆、言などの時節により、次第次第に冬枯の野山色かへぬ松やびばらは其ま四節の軀をのづからそのけしきを以てあらはすれば、四季の花とて別の心得侍るべからず。」	本文-4
8	「蓮などの様な水草に深山の木などを立合せも有。つねは生まじらざる物をさしませてひとつに見ゆるをかめにさす花のとくとかや申せど、蓮にかぎりて樹木の類合へからず。」	本文-18
9	「五節供に専可好草木 元上正月(梅・水仙花・金盞花) 上巳三月(桃・柳・款冬) 七夕七月(桔梗・仙翁花・梶) 重陽九月(菊・萩・鶏頭花)」	本文-19
10	「青・黄・赤・白・黒と心得て次第にさすべし」	本文-20
11	「簪取・嫁取の花は合真、若緑どり。糸薄・糸柳・女郎花・杜若・百合此等を専に可用也。口伝有。」	本文-23
12	「神祇・祈禱・祝言も直なる真可然候」	本文-22
13	「城中・軍陣などにての花の心遣、口伝有之。婦人花をば用と、残花を嫌と、余花の事也。」	本文-26
14	「御成・祝言の花には、凡松・竹・梅・柳・仙蓼葉・椿・桃(中略)。其外、当季の花亦は常盤木などを可用者也」	本文-33
15	「祝言に可嫌草木 雑木・雑草、四花・四葉、六花・六葉(中略) 何にても末のめられたる物、葉のやぶれたる物の類、又名詮あしき草木不可用。」	本文-34
16	「十二月の花の事。」	仙伝抄35
17	「うしろに山を見前に野を見べし。そふじて、遠近とたつる花は、うしろに山の心を立てまへに野をたて、うしろの山をへつらわすたてべし。」	仙伝抄39
18	「さは辺、河、入江などの風ぜいをもたてべし。是、水へんの物をたて、野は野のものをたて、山は山のものをつたつ。それぞれのごとくなるべし。」	仙伝抄60
19	「生花の事、春は夏の花冬は春の花を立なり。」	仙伝抄92
20	「死花の事、春は冬の花、冬は秋の花をいふなり。かくのごとく道理をもつて生死をしるべし。」	仙伝抄93
21	「草たかく木のみじかき事ふる句こいむく澤邊千尺の松たりといへ共、れい頭一すんの草こはしかじという。」	谷川流10
22	「古今と云言葉は一季去りたる花をいふ。今とは當季の花を云。遠とは風情たかくみへるを本木と云。近とはそへ草の水ぎわにてありありしてあるをいふなり。」	奥輝之別紙3
23	「此の一流は野山水邊をのづからなる姿を居上にあらはし、花葉をかざりよろしき面影をもとゝし」	序文
24	「花にその葉のなき時、似たる葉を回事常にあり」	本文-28
25	「十二月に可用也」	本文-31
26	「陰陽の葉とて、面を見する葉あらば、又裏を見する葉を用べし」	本文-32
27	「高くたてざる物の事金銭花・岸比・雁足・葱・ぜんまひ・つわ・石葦・藜蘆・ふきのとう(以降略)」	本文-37
28	「陰のかたに包花を用、陽の方にかひらき花を用なり」	本文-45

今立花大全から各あしらいに名称が与えられ、「胴作り、草留/木留、色切、内副の配置が定められた。江戸後期にはあしらいであった「拵」が「控」へ、「胴作り」が「胴」へと呼称が変更され、あしらいの名称は「内」と「下」へと発展し、役枝との位置関係によってあしらいが決まるようになった。明治期には役枝の漢字表記に変化があるが、立花の構成要素とその役割は現在まで引き継がれている。そうした変遷を経て現在では、あしらいの数は15²⁾あり、「草留/木留、後囲」のように作品に必須のあしらいと、必要に応じて作品に取り組みあしらいの両者がある。

3) 植物の使用方法和意味

扱われる植物は、時代を経るにつれて従来の花伝書の影響を受けて重複内容が多くなるため、ここでは早期の花伝書である『専応口伝』(1523)、『仙伝抄』(1536)、『専応口伝』(1542)の3冊の記述に着目した(表-3)。また、補足的に『臥雲華書』(1630)と『立花時勢粧』(1684)等の文献を分析資料として用いた。

まず、『専応口伝』(1523)は序文と46の条文から15箇所の記述を抽出できた。マツやヒノキなどの常緑針葉樹と季節の植物が詳述されており、枯れ枝を使うことが立花の特徴であり(表-3の1, 4, 6, 7)、立花は見立てによって風景を表現したと読み取れた(表-3の2)。植物の使用意図としては、季節の表現以外に五節句、五行、祝言、軍事、政治、神事、人事などの表現目的によって植物が使い分けられ、風景表現よりもむしろ仏教、祝祭などの精神的意味の表現が強く意図されていた(表-3の3~5, 9~15)。また、「真」の形態によって「神祇・祈禱・祝言」の花と、常の花とが区別されていた(表-3の12)。次に、『仙伝抄』(1536)は仙伝抄の100条、谷川流の17条及び奥輝之別紙の56条、合計173の条文から構成され、それらから7箇所の記述を抽出できた。記述では、仏教と祝祭の行事に飾る花、座敷飾りの花の制作方法を

確認できた。また、1月から12月までの各月を代表する植物が明記されていた(表-3の16)。さらには風景表現には遠近、季節、時間の表現が用いられ、植物によって生育環境の特性が表現されていた(表-3の17~22)。最後に、『専応口伝』(1542)では序文に「此の一流は野山水邊をのづからなる姿を居上にあらはし、花葉をかざりよろしき面影をもとゝし」の一文が加筆されており、この風景表現を重視する志向は『仙伝抄』(1536)の影響と考えられた(表-3の23)。また、『専応口伝』(1542)の本文、62の条文からは6箇所の記述を抽出できた。同種類の植物の花と葉を同時に用いるか、代用の葉を用いるかが検討され使用法の発展がみられた(表-3の24)。さらに、12月までの各月を表現する植物の使い方(表-3の25)、作品における植物の配置方法(表-3の27)、植物及び作品の陰陽表現を確認できた(表-3の26, 28)。

そのほか、上記3冊以降の植物の使用方法和意味について要点を記すと『臥雲華書』(1630)は全7巻から構成され、第2巻は座敷飾り、第5~7巻は生花、砂物、三つ具足の花について記載されていた。立花の植物に関する記述は序文、67条文、後書きから構成される第1, 3, 4巻で確認できた。第3巻は40項目の303条文によって植物の使い方が解説され、第4巻では109種類の植物の使い方が詳しくまとめられていた。内容としては、第3巻は『専応口伝』(1542)を充実させ、各役枝(道具)の作り方と用いる植物の種類²⁾を解説し、「通用物」という池坊独特の植物分類法を作り出していた。さらに、立花の風景表現の意味を強調し、立花の格を「真・行・草」に区分し、それぞれの格に使用できる植物を規定していた。一方、花書『立花時勢粧』(1684)は立花の風景表現を「立花十体」にまとめ、立花全体によって野原、水辺、山と草、山の麓のタケの風景などを表現していた。明治期の花書では、立花の役枝ごとに風景的意味を持たせ、真、副、見越は遠山の景色、正

真, 胴, 請は岩石や滝が流れている絶壁の景色控枝, 前置, 流枝は山麓や集落の景色を表現するように限定された。

3. 花形絵の分析

(1) 研究対象

前章で読み取った花伝書と花書における植物の扱われ方と立花の構成の変化を確認するため、立花作品を写実的に記載する花形絵を研究対象とした。具体的には、歴史の変遷を把握するため時期を江戸初期, 同中期, 同後期, 明治期, 現代の5期²³⁾に区分した上で、『池坊専好立花名作集』²⁴⁾, 『いけばな美術名作集 (4) (5) (8)』²⁵⁾²⁶⁾²⁷⁾, 『守破離柴田英雄立華作品集』²⁸⁾から、明治期までの花形絵と現代の作品写真を抽出した。個々の作品集を概説すると、まず、『立花の次第九十三瓶有』をはじめとする『池坊専好立花名作集』には池坊専好が1617年から1656年の間に制作した作品の花形絵が収録され江戸初期の立花が記録されている。また、『いけばな美術名作集 (4) (5) (8)』にはそれぞれ、江戸中期の『瓶花図彙』(1698), 江戸後期の『新刻瓶花容導集』(1797)と『専定瓶華図』(刊行年不詳), 明治期の『専正立生華集』(1897)が複製収録されている。なお、立花は立花瓶という花器に立てられる「立花」と、砂鉢に立てられる「砂物」の2つの様式がある。さらに、立花は株の数によって立花と2つ真の立花に分けられる。本研究では花器を含めて作品の全体像が描かれる1株の立花に焦点を当て、上述の作品集に収録される計715点の花形絵のうち1株の376点を研究対象として選定した。

(2) 研究方法

作品集には、花形絵とともに作品に用いた植物名が記載されている。そこで、時代ごとの花形絵における役枝とあしらいの有無を把握し、 χ^2 乗検定と残差分析によって立花の構成の発展、とくにあしらいの変化を確認した。次に、それぞれの役枝とあしらいに配置された植物を把握し、カタカナ表記に統一した上で整理した。最後に、役枝による風景表現の規則¹²⁾に従い、各時代の立花の役枝が表現する遠景, 中景, 近景に用いられた植物を把握した。あしらいについてはそれぞれが補う役枝の視距離帯に分類した。

(3) 結果

1) 役枝とあしらいの変化

花形絵に実際に使われた役枝とあしらいの有無, 使用状況(表-4)をみると、江戸初期には7つ道具と呼称される7つの役枝が確

表-4 花形絵から読み取る立花の構成状況及び変化

時代	江戸初期	江戸中期	江戸後期	明治期	現代	
役枝	使用回数	使用回数	使用回数	使用回数	使用回数	
役	真	80/80	89/89	87/87	42/42	69/69
役	副	79/80	89/89	87/87	42/42	66/69
あ	内副	—	16/89	55/87	25/42	8/69
	副内	12/80	29/89	3/87	—	10/69
	副下	44/80	69/89	76/87	40/42	41/69
役	請	77/80	89/89	87/87	42/42	68/69
あ	請座	5/80	10/89	17/87	6/42	6/69
	請内	8/80	41/89	57/87	33/42	23/69
	請下	29/80	55/89	65/87	27/42	23/69
役	流枝	80/80	89/89	87/87	41/42	68/69
あ	流枝内	8/80	21/89	45/87	23/42	13/69
	流枝下	—	2/89	4/87	—	—
役	正真	80/80	89/89	87/87	42/42	69/69
役	見越	62/80	54/89	64/87	34/42	43/69
あ	内見越	—	5/89	12/87	9/42	5/69
	大内見越	—	—	1/87	2/42	4/69
	見越座	—	12/89	1/87	4/42	6/69
	見越下	4/80	27/89	39/87	8/42	19/69
役	控	74/80	89/89	87/87	42/42	69/69
あ	控内	12/80	28/89	51/87	32/42	12/69
	控下	—	32/89	30/87	3/42	9/69
役	前置	80/80	89/89	87/87	42/42	69/69
あ	草留木留	—	—	83/87	40/42	63/69
胴作り		80/80	89/89	—	—	—
胴作りのあしらい		—	83/89	—	—	—
役	胴	—	—	86/87	42/42	68/69
胴のあしらい		—	—	87/87	40/42	53/69

注) 役: 役枝, あ: あしらい ▲: 使用回数割合が多い, ▽: 少ない, (P<.05)

表の中の数字は作品の数を表す。

立され(表-3), すべての作品から「胴作り」, 80作のうち74作から「控」を確認できた。しかし、この時代の役枝の境界は曖昧であり、あしらいの使用も少なかった。江戸中期になると「見越」が省略された作品が見られ、あしらいの数と種類が増えていた。さらに、江戸後期, 明治期になると、あしらいの種類がほかの時代よりも多かった。しかし、現代では、あしらいの数と種類が減少し

表-5 各時代の「真」に用いられた植物

	江戸初期 (作品数: 80)	江戸中期 (作品数: 89)	江戸後期 (作品数: 87)	明治期 (作品数: 42)	現代 (作品数: 69)
針	マツ(50), ヒノキ(4), スギ(2) 56/80 ▲	マツ(50), ヒノキ(2), コケボク(1), カシワ(1) 54/89	マツ(48), ヒノキ(3), イブキ(2), カシワ(1) 54/87	マツ(19), ヒノキ(2), イブキ(2), トガ(2), マキ(1), エンコウスギ(1) 27/42	マツ(21), ヒノキ(1), チャボヒバ(3), ヨロイヒバ(1) 26/69 ▽
落	ヤナギ(3), ウメ(6), モモ(1), キク(1), ススキ(2), ケイトウ(2), モミジ(1), サクラ(1) 17/80	モモ(1), ウメモドキ(3), ヤナギ(1), ウメ(4), モミジ(1) 10/89	ツツジ(1), ヤナギ(3), ウメモドキ(1), スイリュウヒバ(4), ギョリュウウ(1), ウメ(6) 16/87	ウメ(2), ビワ(1), モモ(1), ヤナギ(2), ウメモドキ(1), モミジ(1) 8/42	モミジ(4), ヤナギ(3), ウメモドキ(2), ウメ(1), サクラ(1), トチノキ(1), ホオ(1), コシアブラ(1), ツルウメモドキ(1), オオヤマレンゲ(1), カエデ(1), ユリノキ(1) 18/69
通	タケ(2) 2/80	タケ(5), ナンテン(5) 10/89	タケ(4), ナンテン(1) 5/87	タケ(1) 1/42	タケ(3), フジ(1), オウバイ(1), セイヨウナンテン(1) 6/69
陸	スイセン(3), カンゾウ(1) 4/80	ススキ(1), キク(1), スイセン(2), ケイトウ(1) 5/89	キク(1), ススキ(1), キビ(1) 4/87	ススキ(1) 1/42	スイセン(2), オクラレカ(3), ヤマユリ(2), ススキ(2), キク(2), クワズイモ(1), カラジウム(1) 13/69 ▲
水	ハス(1) 1/80	アシ(4), ハス(2) 6/89	カキツバタ(1), ガマ(1), ハス(1), アシ(1) 3/87	カキツバタ(1) 1/42	アシ(1), ハス(2) 3/69
その他		ヤナギ&シャレボク(1), ウメ&コケボク(1), マツ&フジ&コケボク(1), カキツバタ&アシ(1) 4/89	フジ&マツ&コケボク(2), ヤナギ&シャレボク(1), マツ&ヒノキ(1), フジ&マツ(1) 5/87	マツ&ヒノキ(1), シャレボク&ヒノキ(1), シャレボク&イブキ(1), シャレボク&ナンテン(1) 4/42	モミジ&シャレボク(1), ハス&カスミソウ(1), ツワブキ&ハクチョウゲ(1) 3/69

注) 針: 常緑針葉樹, 落: 落葉広葉樹, 通: 通用物, 陸: 陸生草本, 水: 水生草本 括弧の中は作品の数を表す。▲: 使用回数割合が多い, ▽: 少ない, (P<.05)

他: 2種以上の植物から構成された真

ていた。そのほか、江戸後期から現代まで「流枝内」「草留/木留」「胴のあしらい」を数多く確認できた(表-4)。

2) 役枝とあしらいに用いられた植物の時代別特徴

立花作品における真は他の役枝の配置、作品の表現内容を規定するため最重要の役枝であり、真に用いられた植物を一覧表に整理した結果(表-5)、各時代において常緑針葉樹の割合が最も多く、江戸初期の割合は最も大きかったが、現代では低かった。用いられた植物の種類ごとにもみると、マツはすべての時代において上位に位置していた。明治期では真に用いられる針葉樹の種類が最も多かった。常緑針葉樹に次いで多く用いられる植物は落葉広葉樹であり、江戸初期に使用される樹種のうち、現代まで継続して使われてきた植物はヤナギ、ウメだった。一方、江戸後期のスイリュウヒバ、ギョリュウ、明治期のビワはその時代にもみ使用されていた。用いられる植物の多様性は現代で最も大きかった。各時代の通用物はタケ、ナンテンに集中し、陸生草本の種類は現代において増加していた。また、江戸中期からは、2種類以上の植物を組み合わせて真を構成する作品が現れていた(表-5のその他)。

統一表記(表-6)によって用いられた植物を整理すると、同種の植物であっても多様な部位が異なる状態で使われていた。たとえば、マツでは樹齢が異なるオイマツとワカマツ、枯れたマツ、マツカサ、コケが付着する幹が使われ、ウメではズウエ、花のある枝、コケが生えた枝が作品に記載されていた。ハスでは蓮、白蓮、紅蓮などの表記があり、さらに花形絵ではつぼみ、開花、実、巻葉、開き葉、朽ち葉が一瓶の作品に使われていた²⁹⁾³⁰⁾³¹⁾³²⁾。また、採取直後の生の植物ではなくシャレボク、カレボク、コケボクが使用され、とくにマツ、ウメ、タケの枯れ枝、コケが付着するツツジ、ウメ、マツの幹が好まれていた(表-5のその他)。

3) 立花の遠景、中景、近景の各視距離帯に配置された植物の特徴

立花に表現される遠景、中景、近景の各視距離帯に配置された植物を整理し、用いられた回数が上位10位までの植物を整理した結果(表-7)、各時代の遠景に用いられる植物のうち、木本植物の種類は江戸初期が33種類と一番多かった。また、草本植物は、江戸初期が9種類、同中期が11種類、同後期が9種類、明治期が4種類、現代は23種類だった。さらに、江戸後期から中景が確立していた。使用回数上位5位までの植物は、江戸後期ではマツ、イブキ、ツゲ、タケ、キクだったが、明治期にはイブキ、マツ、カキツバタ、スイセン、ツゲに、現代ではマツ、イブキ、シャレボク、コケボク、ウメモドキに変化していた。また、現代に用いられる植物

表-6 本研究における植物の統一表記と作品集での名称

統一表記	作品集に使用された名称
イブキ	伊吹、いぶき、伊吹のシャレボク
ウメ	梅、白梅、紅梅、梅のずわえ、梅の苔木、梅の苔木
ウメモドキ	梅もどき、梅嫌
コシダ	小蘆朶、こしだ
シャガ	しゃが、著菘
ツゲ	柘植、つげ
ツツジ	躑躅、つつじ、つつじの苔生
マツ	松、老松、若松、緑松、五葉松、松の苔木、松のシャレボク、松毬、松の枯れ枝
ハス	蓮、白蓮、紅蓮
ヒノキ	檜葉、檜、ひのき
ビワ	枇杷、びわ

の種類は64種類となり3つの時代において一番多かった。さらに、江戸初期、中期の近景に使用された植物の種類は同時代の遠景より多かった。そのほか、江戸初期の70種に次いで、現代の近景にも62種の植物が使用されていた。

遠景、中景、近景の視距離帯別にみると、マツ、スイセンなどが各時代の遠景、中景、近景のすべてに配置される一方で、コキク、コシダなど近景にしか分布しない植物もあった。また、江戸中期まで用いられたカタキ(クヌギの別称)、カシなどのカシ類の高木、江戸後期のコシダなど、時代の進展にともない使われなくなった植物がある一方で、新しい植物が用いられるようになるなど、植物の種類には後退と台頭があった。そのほか、現代ではオクラレルカというアヤメ科の草本植物の葉が多く使われるなどの特徴もみられた。

4. 考察

(1) 立花の構成の変化と発展

立花の表現内容と作品に配置される植物は立花の構成の変化による影響を受けると考えられるため、まず、立花の構成の変化について理解することが求められる。全体としてみると、本研究で明らかにしたとおり、室町時代の役枝のみによる立花の構成は、江戸時代に登場するあしらいによって完成したと考えられる。具体的には、江戸初期にはあしらいが登場し、江戸中期には役枝の分化、あしらいの種類が増加とともにそれらの用い方の規則が創られていた。さらに、江戸後期にはあしらいの役割が明確化され、立花の構成の変化が少なくなり安定していた。明治期には役枝の

表-7 各時代の遠、中、近景に分布する植物の上位10種

	江戸初期(作品数:80)		江戸中期(作品数:89)		江戸後期(作品数:87)		明治期(作品数:42)		現代(作品数:69)	
	上位10種	種数	上位10種	種数	上位10種	種数	上位10種	種数	上位10種	種数
遠	マツ(69)、ウメ(45)、ヤナギ(22)、ヒノキ(22)、ススキ(16)、フジ(15)、ビワ(13)、スイセン(12)、タグ(7)、モモ(5)	計45 木33 草9 通2 他1	マツ(56)、ススキ(25)、ウメ(22)、キク(18)、ヒノキ(16)、ナンテン(15)、タケ(11)、ウメモドキ(9)、アシ(9)、カキツバタ(7)	計28 木12 草11 通3 他2	マツ(81)、ウメ(26)、ヒノキ(25)、カキツバタ(14)、キク(11)、ウメモドキ(11)、ヤナギ(9)、タケ(8)、フジ(6)、スイリュウヒバ(6)	計34 木19 草9 通3 他3	マツ(38)、ヒノキ(11)、ウメ(8)、モモ(8)、ヤナギ(6)、キク(5)、トガ(5)、ウメモドキ(5)、カキツバタ(4)、ススキ(4)	計26 木19 草4 通2 他1	マツ(26)、ヒノキ(17)、オクラレルカ(12)、ススキ(10)、モミジ(9)、ヤナギ(7)、フジ(7)、ビワ(6)、スイセン(6)、タグ(5)	計54 木29 草23 通1 他1
		計0 木0 草0 通0 他0		計0 木0 草0 通0 他0	マツ(78)、イブキ(43)、ツゲ(33)、タケ(18)、キク(15)、スイセン(13)、ウメ(11)、シャレボク(9)、コケボク(6)、カキツバタ(6)	計29 木14 草10 通3 他2	イブキ(28)、マツ(27)、カキツバタ(14)、スイセン(9)、ツゲ(9)、キク(8)、ウメモドキ(6)、タグ(5)、ウメ(3)、モモ(3)	計23 木11 草8 通3 他1	マツ(43)、イブキ(25)、シャレボク(15)、コケボク(14)、ウメモドキ(13)、スイセン(11)、モミジ(8)、オクラレルカ(7)、キキョウ(6)、カキツバタ(5)	計64 木23 草37 通2 他2
中	ツゲ(67)、マツ(65)、コシダ(46)、ビワ(43)、ヒノキ(42)、イブキ(37)、ツバキ(30)、キク(27)、シャガ(26)、ツツジ(26)	計70 木32 草31 通3 他2	ツゲ(114)、マツ(84)、ビワ(55)、ツバキ(42)、ナツハゼ(38)、ヒオウギ(35)、コシダ(34)、コキク(33)、イブキ(28)、キク(17)	計49 木20 草21 通6 他0	マツ(86)、ツゲ(64)、ウメ(20)、カキツバタ(17)、ツバキ(15)、ヒノキ(8)、ウメモドキ(8)、コケボク(7)、イブキ(6)、スイセン(5)	計28 木17 草10 通0 他1	マツ(39)、ツゲ(37)、ウメ(12)、ウメモドキ(10)、カキツバタ(6)、モモ(5)、モミジ(3)、ツバキ(2)、イブキ(2)、トガ(2)	計19 木12 草6 通1 他0	マツ(35)、ツゲ(27)、オクラレルカ(17)、ツバキ(12)、スイセン(12)、モミジ(8)、ナツハゼ(8)、ウメモドキ(6)、コケボク(6)、ヒノキ(5)	計62 木21 草39 通2 他1

注) 計:合計、木:木本植物、草:草本植物、通:通用物、他:その他 括弧の中の数字はその植物が使用した作品の数を表す。

変化は少なくなり立花の構成が固定化され、現代は明治期よりも自由になり、作品に役枝の誇張と省略が取り入れられて表現の主導性が強くなったと考えられる。

(2) 立花と植物の表現方法とその意味の変遷

『花王』(1486)に記載された植物のうち種類を特定できるものは9種類と少なく、「水辺の物」「木の花」などの曖昧な記述により種類を特定できない植物が多数あった。植物の記載があったとは言え、この時期はいけばな作品の全体によって意味を表現していた時期と考えられ、自然風景や季節を表現し、祝祭行事、感情表現、住宅環境など人間活動の様々な場面にいけばなが取り入れられていた。

『専応口伝』(1523)以降になると立花が確立し始めるとともに、立花の風景表現の性格が強くなり、植物の種類とその用いられ方が多様化するが、植物の使用を通して作品には仏教、祝祭的な意味の導入が強くなり意図されていた。事実、「直真立花(真がまっすぐ伸びる立花)」は宗教式典、祝祭行事に用いられるとの記載(表-3の12)があり、特定の植物の種類の使用だけでなく、特殊な形状、状態の植物によって宗教的、祝祭的な意味が表現されていた。『仙伝抄』(1536)からは、植物によってその生育環境の風景と遠近、季節、時間が表現され、風景表現における植物の重要性が高まったと考えられる。『専応口伝』(1542)を経て『臥雲華書』(1630)では立花の風景表現の意味が強調され、用いる植物の種類とその使い方がさらに詳しく記述されていたことから、これら2つの花伝書は池坊立花の理論を統合し原理を確立した書であり、「風景表現」の方法の伝承を担ったと考えられる。以降、江戸中期の『立花時勢粧』(1684)では立花の全体によって風景を表現し、明治期に入ってピワを岩、草本植物を水の流れの象徴とするなど、風景表現の媒体は作品全体から植物へと具現化され、その表現方法は直接的な表現から象徴的な表現へと発展したと考えられる。

現代では立花は「多種多様な植物によって自然風景を表現するいけばな様式である」と定義されているが、草創期のいけばなは飾り花の性格が強くなり、江戸時代に風景表現の性格が強くなり、江戸後期の立花構成の安定とともに風景表現の方法と役枝の役割が確立したと考えられた。また、明治期は立花構成が固定化され、象徴的な風景表現が強化された時代と位置づけられる。このように立花と植物が表現する意味は時代とともに変遷したと言える。

(3) 用いられる植物と配置の特徴

立花形式の発展過程には用いられる植物とその配置に複雑化と多様化があった。まず、江戸初期の花伝書には「真には松或は当季の花」(表-3の6)とあり、真に常緑針葉樹とりわけマツが最も多く用いられ、次いで落葉広葉樹である「当季の花」が用いられ、本研究のすべての時代区分でそれらの植物が用いられた花形絵を確認できた。しかし、用いられた常緑針葉樹の種類には多様性がなく、限定された種類が様々な作品に繰り返し用いられていた。

また、立花を確認できる時期よりも前から、作品の制作目的と植物の状態によって植物の使い分けが行われ、立花が確立された時期以後においても同種の植物の多様な部位が異なる状態で使用されたことを確認できた。また、採取直後の生の植物以外の植物素材の使用も、立花を確認できる時期よりも前から現代に至るまで行われている。

一方、用いられる植物とその配置については現代まで受け継がれた原理、原則だけでなく、時代とともに変化したものもあった。特殊な表現を除けば、江戸初期には同一作品中に同種の植物を1ヶ所にのみ用いていたが、同中期からは1つの作品に同じ植物を複数箇所に用い、広がりを感じられる風景表現、近景から遠景までの奥行き感を感じられる風景表現が創造されていた。

花材の種類を役枝とあしらいで比較すると後者で種類に多様性があった。あしらいのうち、副、見越、請、流枝、控は作品全体に

占める空間量が少なく奥行き感を出す働きを持っていると考えられ、植物としては高木の常緑針葉樹が多く用いられ、遠景を作品に取り入れる遠近表現の手法の一つと考えられた。

補注及び引用文献

- 1) 鈴木榮子 (2011) : いけばなにみる日本文化—明かされた花の歴史 : 思文閣出版, 342pp
- 2) 華道家元池坊ホームページ <<https://www.ikenobo.jp/>>, 2016.6.15 更新, 2020.8.29 参照
- 3) 水江漣子 (1987) : 近世立花書の系譜 : 立花資料集成・研究注解編 : 東京美術, 21-28
- 4) 池坊専順 (1486) : 花王以来の花伝書 : 池坊総務所
- 5) 村井康彦・赤井達郎 : 池坊専応口伝 (1973) : 古代中世芸術論 : 日本思想大系 23 : 岩波書店, 449-464
- 6) 工藤豊・小野良平・伊藤弘・下村彰男 (2007) : 柿の表象表現にみる風景観の変遷に関する研究 : ランドスケープ研究 70(5), 369-372
- 7) 谷光燦・田代順孝・木下剛・章俊華 (2008) : 竹が描かれた山水画における空間の表現に関する研究 : ランドスケープ研究 71(5), 603-606
- 8) 小泉武栄 (2002) : 日本人の風景観と美的感覚の変遷 : 万葉集の時代から現代まで, 東京学芸大学紀要 第3部門, 社会科学 53, 137-156
- 9) 深田てるみ・平井聖 (1990) : 専好立花図から見た後水尾院天皇時代の内裏の紫宸殿「立花御会」について : 日本建築学会計画系論文報告集 417(0), 137-145
- 10) 深田てるみ・平井聖 (1991) : 専好立花図から見た寛永度後水尾院御所における立花が行われた御殿について : 日本建築学会計画系論文報告集 423(0), 91-99
- 11) 村上朝子・藤井英二郎 (1994) : 立花および盆栽と庭園植栽意匠との関わりに関する史的考察 : 造園雑誌 57(5), 25-30
- 12) 陸丹・中村和彦・山本清龍・下村彰男 (2020) : 池坊の立花にみる視距離帯に関する風景認識の変遷 : 日本造園学会 : ランドスケープ研究 83(5), 557-562
- 13) 田中重太郎, 岡田幸三 (1981) : 仙伝抄 (上) : 日本華道社, 238pp
- 14) 岡田幸三 (1987) : 臥雲華書 : 立花資料集成・研究注解編 : 東京美術, 109-232
- 15) 華道沿革研究会 (1930-1931) : 古今立花大全 : 大日本華道会, 178-217
- 16) 岡田幸三 (1987) : 草木上下位 : 立花資料集成・研究注解編 : 東京美術, 379-391
- 17) 華道家元池坊 (2005) : 立華時勢粧 : いけばな美術名作集第三巻 : 日本華道社, 223pp
- 18) 池坊専威 (1942) : 華道読本上 : 華道家元華務課, 57pp
- 19) 池坊専威 (1942) : 華道読本下 : 華道家元華務課, 61pp
- 20) 森部隆 (2010) : もっといけばな立花 : 日本華道社, 159pp
- 21) 現在に使用される15のあしらい : 胴内, 控枝内, 請内, 流枝内, 副下, 見越下, 請下, 草留, 木留, 胴脇, 色切, 大葉, 後田, 座である。
- 22) ここでは生物学的な種を意味せず、以降の記述も同様である。
- 23) ここでは1603-1699年を江戸前期, 1700-1749年を同中期, 1750-1867年を同後期, 1868-1911年を明治期, 1945-1997年を現代と時期区分した。なお, 1912-1945年は同時期を代表する花形絵がなく時期区分の対象としなかった。
- 24) 華道家元池坊 (1976) : 池坊専好立花名作集 : 日本華道社, 253pp
- 25) 華道家元池坊 (2002) : 新撰瓶花図彙 : いけばな美術名作集第四巻 : 日本華道社, 134pp
- 26) 華道家元池坊 (2006) : 専定代瓶花集 : いけばな美術名作集第五巻 : 日本華道社, 150pp
- 27) 華道家元池坊 (2004) : 専正立生華集 : いけばな美術名作集第八巻 : 日本華道社, 142pp
- 28) 柴田英雄 (1997) : 守破離柴田英雄立華作品集 : 日本華道社, 179pp
- 29) 華道家元池坊 (1976) : 池坊専好立花名作集 : 日本華道社, 61
- 30) 華道家元池坊 (2002) : 新撰瓶花図彙 : いけばな美術名作集第四巻 : 日本華道社, 65, 75
- 31) 華道家元池坊 (2006) : 専定代瓶花集 : いけばな美術名作集第五巻 : 日本華道社, 54
- 32) 柴田英雄 (1997) : 守破離柴田英雄立華作品集 : 日本華道社, 40

(2020.9.26受付, 2021.3.30受理)